青年のアパシーに関する研究　I *

——ステューデント・アパシー下位尺度の検討——

A Study of Apathy Syndrome in University Students I

——An examination on subclassification of student apathy test——

髙尾　正

1 問題

現代の青年の心理をあらわす用語として、三無主義（無気力・無関心・無感動）が使われだして相当な年月になる。青年、特に大学生に顕著であるこのような傾向は、ステューデント・アパシーとよばれ社会問題として話題を提供している。甘えの構造が出版されたのは1971年のことであるが、そのなかで、土居健郎（1971）は、学園紛争における青年の反抗について考察している。それは、戦う現代青年の心理について述べられたものであるが、一見、アパシーとは無縁な過激な学生の行動の背景にある「無気力」の存在について考察を加えている。それは、現在の体制を批判し、体制の破壊を主張し、暴力による革命を遂行しながら、なおかつ、自からを被害者として位置づける青年の思考プロセスである。

さらに、小批木啓吾（1978）も、この学園紛争を青年のモラトリアム化傾向の萌芽と位置づけ、同様の見方を示している。アメリカにおいても、1950年代後半から1960年代にかけて、青年の無気力化が社会問題となり始めた頃、これらの青年たちによる過激な反体制運動が生まれ、学生の留年や中退が激増していった（石井完一郎　1981）。我が国においても、学園紛争終息とともに大量留年が社会問題となりはじめ、ステューデント・アパシー（Walters P. A. 1961）の概念が我が国でも定着しはじめた。

ステューデント・アパシーの症状については、多くの考察がなされているけれども、その中心概念は「やる気のなさとシラけ」ということであろう。このような現代の青年の生態について、久世敏雄（1989）は、石井完一郎などと同様、特定出生コーホートと社会と

＊）本研究は1992年度相愛大学特別研究の報告の一部である

の相互作用の過程として捉えるべきだと主張する。1945年の終戦、1960年代の既成の権威の否定と目標性の喪失、そして、1970年代に入り留年、校内暴力、家庭内暴力、登校拒否等の青年の問題の顕在化の時代へという流れである。

堀淑昭（1981）は、シラけを現代文明の人間疎外という欠陥の産物として捉え、シラけを病理現象と考えているが、同時に堀は、シラけを一面、文化からの解放として、科学文明社会におけるシラけの必然性にも言及している。このような高度科学文明社会における、青年の生き方はどのようなものであろうか。青年はなぜアパシーに陥るのであろうか。西平重喜（1987）は、現代の日本人の人生観を国際比較し、全体に「くらい」日本人像を結論している。物事を深刻には考えず、感激性が少なく、現実的である。さらに、享楽的であり、経済的な豊かさへの関心が強く、運やチャンスを気にし、生活に対する満足度が低い、時に強い不満を持つ。このような日本人の人生観の報告は、「もの」があふれ、物質的には恵まれた生活を享受しながら、なおかつ精神的に満たされない日本人の実態が示されている。反田健（1972）も、無限とも思える自由と豊かさのなかで、多くの青年が、恵まれていると感じながら、むしろそれ故、悩みや困難を抱えている状況を報告している。また、岩田紀（1980）は、このような傾向を都市的行動様式のなかで説明している。

このように豊かな社会で育ちながら、なぜ満足できないのか、この点について日本の子どもたちの生活意識調査から、深谷昌志（1990）は、中学生を対象とした調査で、成績と将来の可能性の予測との関係を分析している。それによれば、成績が低くなればなるほど、閉ざされた将来を感じるようになる。すなわち、子どもたちが、社会的な達成に関心を示さないのではなく、達成を断念しているのであろうと推測する。このような現実と、子どもたちの現実認識が子どもたちを無気力やシラけに追い込んでいるとみるべきであろう。

現代の学生は、よい成績やよい就職には魅力を感じているが、その前提となるよい成績をとるための勉強からはおりてしまう。そして、このようなステューデント・アパシーは、学生生活においては問題が表面化することは少ない（水口禮治　1985）。そして、学生自身それを認識しているが故、大人になりたくない、モラトリアムに陥るのであろうか。

2　方　法

大学生のアパシーの下位尺度の作成に当たっては、アパシー・シンドロームの構造研究を参考にした。ステューデント・アパシーの症状については、既述のように無関心、無感動、無責任を主訴とするが、範囲の限定は必ずしも一致を見ているわけではない。土川（1990）は、カウンセリングの立場から、神経症症的人格構造上に生じるアパシーと、特有の人格構造上に生じるアパシー（典型例）を区別し、さらにそれらを再分類している。典型例アパシーの症例としては、自我同一性の未確立と自我の防衛、自己決定・自己選択

などの自己の問題についての現実吟味能力低下、受身－強迫的性格とそこから生じる対人関係の回避を、その特徴としてあげている。

石井（1980）は、アパシーを中心とした無気力の構造を分析して、コースに「のり」遅れたとたん気力低下を招く潜在的無気力予備群、多次元的な「関わり」を拒否する、精神傷害的アパシー、「シラける」の用語で説明される、文化的アパシーに分類した。さらに、アパシー近縁症候群として、遅延（ぐず）、弛緩（ものぐさ）、回避（さける）の3型を、アパシーの近縁症候群としてあげている。

下山（1992）は、日本の青年期のモラトリアムの症例としてのアパシーに注目し、モラトリアムの下位構造にアパシーに相当する構成概念を、回避と命名し下位分類としている。この回避を含む、拡散・安易・延期の4概念は小批木（1977）の提唱するモラトリアムの概念のなかに含まれるものである。これらは、石井の概念である、シラける、さける、ぐず、に対応するものであり、ステューデント・アパシーの症状を、このような概念でまとめあげることが可能であるとおもえる。

そこで、このような概念から、現実的なアパシー症状を、次のような15の下位構成概念を採用した。

Ⅰ　感情抑制の困難（感情）

自己のコントロールをすることが困難で、感情をストレートに表現し理性的な行動が取りにくい。

Ⅱ　快楽志向（快楽）

自己中心的な思考と行動を基本とする。要求不満耐性が低く、客観的な判断が困難である。幼児傾向が強く、他の人の立場を思いやることが困難である。

Ⅲ　無責任（無責任）

アパシーの中心的な概念であり、現代青年の典型的な行動様式と考えられる。思考的な外向性に欠け、因果関係の把握の困難から、全体を見とうすことができず、結果を考慮することなく行動にはしる。

Ⅳ　将来志向の欠如（将来）

時間の流れのなかで、自己を捉えることが困難で現実課題に束縛されやすい。虚無的な傾向が強く、人生設計をもたず、または、その決定を延期しようとする傾向がある。

Ⅴ　無感動（無感動）

感情表現が乏しく、青年らしい生気に欠ける。「シラける」という言葉で表現されるように、さめた現実感で世のなかと関わろうとする。それには、世のなかに対する現実的な分析と無期待が存在する。

Ⅵ　努力の放棄（努力）

根気と持続性に欠ける。毎日の積み重ねや、ドリルを苦手とする。表れた結果のみで判断し、それに至るプロセスに注目しない。はじめからあきらめ、要求水準を低く設定する傾向がある。

Ⅶ　学業からの退却（学業）

大学の入学が目的であり、入学後は勉強意欲を喪失する。勉強の目的を見いだせず、同時に、それ以外のものにも目的を持つことができない。

Ⅷ　現実的行動の欠如（現実）

自己を客観しすることが困難で、現実吟味に欠けた行動をとる。問題を分析し計画的に行動することが苦手である。願望の実現に努力のではなくて、非現実的な自己逃避のメカニズムによって解決をはかろうとする。

Ⅸ　社会性からの後退（社会性）

現代の青年は同調傾向が強い反面、社会との関わりを煩わしく思う傾向が強い。人との強いむすびつきを避け、表面的な交友にとどまろうとする。それは、束縛を避け、自由に振まいたいとする自己中心性と関わる。

Ⅹ　外罰（外罰）

自己を被害者として意識することによって、自分の立場を正当化しようとする。原因を自己の以外のものにに帰属することによって、責任を回避することができる。

Ⅺ　延期（延期）

青年のモラトリアムにあたる。決断と責任を避けることによって、現実への直面を避けようとする。独立への不安と、義務を免除されたぬるま湯的世界を離れることへの恐れが交錯している。

Ⅻ　無気力（無気力）

アパシーの典型概念である。学習性無気力は状況のコントロール不可能の経験から多く生じることが確かめられている。年少時から、枠組みのなかで成長してきた多くの現代の青年は、目的意識を持たないがゆえやる気を持ちえない。

ⅩⅢ　自己効力感の欠如（自己効力感）

自己の行動に対する自信と、自己の行動による環境の変革の可能性の予感は行動を生起させる。しかし、このような自己効力感の欠如は、アパシーの基本概念となるものである。

ⅩⅣ　決断の回避（決断）

延期と方法論的な側面を構成している。自信の欠如、意志の弱さや劣等感が原因となってものごとの決断から逃避しようとする傾向。

XV　依存性（依存性）

消極的な社会との関わりかたや、過度の他人への同調性。決断の回避と関わり自己決定ができない。不安傾向が強く、他人との関わりでそれを解決しようとする。

質問紙の作成にあたっては、15の変数のそれぞれについて5項目の質問を作成し、各項目ごとに、まったくそのとうりである－まったくそのとうりではない　までの5段階評定求め、それを5－1点に変換し、粗点した。この尺度を、大学1，2，3回生女子、125名に実施した。実施時期は1992年11－12月である。

3　結果と考察

ステューデント・アパシー15下位変数の全体の平均15.53、標準偏差3.72、75項目総計の平均231.50、標準偏差34.08であった。まず最初に、感情から依存性までの15変数のそれぞれについて、相関を求め（Table省略）、さらに、最大値より5項目間の共通性を推定した（Table 1a）。その結果から、第2変数である快楽志向変数の相関と共通性係数を検討し、この尺度をステューデント・アパシー下位尺度から省くことにした。他の14変数についても、共通性係数が .30を下回る項目を省くこととし、それぞれ5項目のうち1項目を減らし1変数につき4項目として新たに分析をすすめることとした。ただし、第1、9、12変数については、共通性係数が .30を下回る項目が存在しなかったけれども、項目数を統一するために係数のもっとも小さい項目を省いた。14変数、4項目の項目番号と、それぞれの平均値と標準偏差は Table 1b に示したとうりである（Table 1b で、平均と標準偏差の未記入の項目が省いた項目である）。

全体に1パーセント水準の有意差が認められた。平均値からみるとアパシー下位変数は、10～11点代の下位得点群（無責任、将来、無感動、社会性、外罰、無気力の6変数）と、13～14点代の上位得点群（感情、努力、学業、現実、延期、自己効力感、決断、依存性の8変数）とに分けることができる（5パーセント水準のテューキー検定の結果下位群と上位群のそれぞれの差は有意であった）。ステューデント・アパシーの典型症状である無責任、無感動、無気力の3変数はいずれも、下位得点群にグルーピングされている。そして、上位群の変数は、感情、延期、決断や依存性の、「大人になりきれない未分化傾向」そして、努力、学業、現実、自己効力感の、「怠惰とあきらめの傾向」にまとめることができるであろう。すなわち、現代の女子青年のアパシー症候群の解釈を、「楽に生きること」とすれば理解しやすいのではないだろうか。

つぎに、アパシーの下位変数を項目ごとに検討してみたい。感情の変数では、「思いどうりにならないことがあるとイライラする」の項目の平均値が3.95と高く、要求不満耐性

Table 1 a, b スチューデントアパシー尺度の下位項目

a　共通性の推定　　b　4項目の平均と標準偏差

No.	項　目	a 共通性	b M	SD
Ⅰ	感情抑制の困難**		13.02	3.71
1	すぐ不気嫌になる	.572	3.18	1.23
2	みさかいなく行動することが多い	.452		
3	思いどうりにならないことがあるとイライラする	.572	3.95	1.13
4	自分をおさえられないことがある	.491	2.58	1.26
5	感情的になることが多い	.491	3.28	1.30
Ⅱ	快楽志向			
6	ほしい物があると無理をしても買うことが多い	.280		
7	いやなことはなるべく避けて通りたいと思う	.280		
8	がまんするのが苦手である	.238		
9	いつも自分のやりたいようにやる	.165		
10	他の人にあまり気をつかわない	.165		
Ⅲ	無責任**		10.43	2.81
11	約束を守らないことがある	.470	1.81	.81
12	責任を問われるような事はなるべく避ける	.485	3.30	1.06
13	人まかせにすることが多い	.485	2.90	1.00
14	なんとかなるだろうと考えることが多い	.248		
15	時間にルーズである	.470	2.41	1.33
Ⅳ	将来志向の欠如**		10.94	2.82
16	先のことはあんまり考えず今やりたいことをやるほうがよい	.346	3.18	1.02
17	今から将来の計画など立てようがない	.308	2.62	1.22
18	持っているお金はすぐに使ってしまうほうである	.218		
19	将来のために今苦労するのはあまり意味がない	.328	1.75	.85
20	人生はなるようにしかならないと思う	.308	3.33	1.21
Ⅴ	無感動**		11.54	3.21
21	うれしい時でもあまり表情にでない	.239		
22	最近感動したようなことはほとんどない	.416	2.10	1.26
23	何でそれぐらいのことで騒ぐのか不思議に思うことがある	.396	3.76	1.12
24	人の話に引き込まれるような経験はほとんどない	.416	2.29	1.10
25	はしゃいでいる人を見るとしらけることがある	.396	3.38	1.18
Ⅵ	努力の放棄		14.27	3.32
26	毎日コツコツ積み重ねていくようなことは苦手である	.462	3.53	1.25
27	楽してもうかるようなことはないかと考えることがある	.309	3.55	1.29
28	楽に毎日が過ごせればそれにこしたことはないと思う	.462	3.66	1.19
29	計画を楽なほうに変えることがある	.321	3.42	1.04
30	途中で投げ出すことが多い	.197		
Ⅶ	学業からの退却**		14.54	3.23
31	最近机に向かうことは少ない	.487	3.86	1.24
32	なかなか勉強しようという気にならない	.487	3.76	1.21
33	勉強を始めるまでに時間がかかる	.452	3.94	1.17
34	授業をさぼることがよくある	.312	3.02	1.35
35	勉強してもしなくてもそんなに変わりはないと思う	.266		
Ⅷ	現実的行動の欠如**		13.18	3.25
36	無理な計画を立てて失敗することがある	.214		
37	計画的に行動することが苦手である	.350	3.14	1.23
38	無理して高いものを買うことがある	.362	2.77	1.25
39	理想を追うことが多い	.545	3.59	1.18
40	夢物語のようなことを考えることがある	.545	3.70	1.20
Ⅸ	社会からの後退		11.05	3.36
41	時々友達としゃべるのがおっくうになる時がある	.472	2.90	1.12
42	友達とはほどほどにつき合うのがいいと思う	.506	2.61	1.30
43	クラブ活動などには興味がない	.506	2.50	1.34
44	一人のほうが気楽でよい	.472	3.06	1.12
45	学校や社会の行事には　ほとんど参加しない	.366		
Ⅹ	外罰*		11.86	3.31
46	世の中なにかと不公平だと思う	.452	3.69	1.15
47	わたしはいつも運が悪いと思う	.568	2.90	1.18
48	私の良いところを解ってくれる人はあまりいない	.568	2.27	1.00
49	うまくいかない時など他人のせいにすることが多い	.377	3.03	.92
50	人にじゃまされることが多いと思う	.286		
Ⅺ	延期**		14.13	3.14
51	いずれ社会にでていくという実感がわかない	.385	3.30	1.31
52	もっと長く大学生でいたい	.385	3.70	1.28
53	一人前に扱われるのはかえって不安である	.189		
54	もう大人であるという実感がない	.360	3.58	1.09
55	子供は楽でよいと思うことがある	2.19	3.56	1.20
Ⅻ	無気力*		11.01	3.80
56	物事に真剣に取り組む気がしない	.422	2.20	1.09
57	何もやる気のしない日がある	.301		
58	いつも疲れたような気分である	.452	2.88	1.27
59	一生懸命打ち込めるものがない	.452	3.00	.53
60	どうでもいいやとあきらめることが多い	.399	2.83	1.05
ⅩⅢ	自己効力感の欠如		13.82	3.41
61	わたし一人が頑張っても世の中あまり変わらないと思う	.173		
62	努力をしても認められないことはよくあると思う	.326	3.21	1.18
63	他の人より負けていると感じることが多い	.591	3.38	1.07
64	充実した日であったと思うことが少ない	.356	3.05	1.38
65	なかなか自信がもてない	.591	3.94	1.02
ⅩⅣ	決断の回避*		13.11	2.95
66	一日延ばしにすることが多い	.337	3.76	1.09
67	嫌なことはなるべく後回しにする	.337	3.15	1.20
68	人に決めてもらうことが多い	.217		
69	断定するような事はなるべく言わない	.428	3.15	1.18
70	就職や結婚など決めてしまうのが恐いと思うことがある	.428	3.06	1.32
ⅩⅤ	依存性		13.57	3.10
71	すぐ人に頼ることが多い	.300	3.37	1.17
72	先頭にいると何となく不安である	.372	3.64	1.12
73	友達を誘って行動することが多い	.300	3.13	1.20
74	みんなと同じことをしていると安心である	.346	3.56	2.70
75	両親のそばにいるとなんとなくホッとする	.204		

4項目間　**　P>.01　　*　P>.05

の低いことが示されている。無責任の変数では、「約束を守らないことがある」「時間にルーズである」の約束の不遵守より、結果責任の回避傾向が強い。将来の変数では、刹那志向が認められる反面、「将来のために今苦労するのはあまり意味がない」の項目の平均値が1.75と低く、将来計画のための準備の必要性を否定しているわけではない。しかし、努力の変数との関連でわかるように、実際の行動が伴うわけではない。無感動の変数では、感動体験は、それほど否定的ではないものの、やはり他の人の感動体験には距離をおく「シラけ」傾向は認めることができる。努力と学業の2変数は、14変数のなかで特に高い値を示しており、勉強しない努力しない大学生の現状が示されている。「授業をさぼることがよくある」の項目点は他の項目と較べて有意に低く、自ら行動しないが指示されればそれには従うという現代女子青年の一面が表れているのではないか。現実の変数では、衝動的傾向よりも、ファンタスティカル傾向が強く、女性特有の現象であるかもしれない。

社会性からの後退の変数は、相対的には高い得点を示しているわけではない。しかし、いずれの項目もこの変数を肯定している。こうした点から考察すれば、さきに述べた、表面的な交友関係を支持しているとも考えられる。外罰も相対的に高くない平均値を示す変数のひとつである。しかし不公平感は相当強いといえよう。延期の変数は、いずれの項目も高い値を示し、大学生のモラトリアム傾向を証明している。無気力変数では、「ものごとに真剣に取り組む気がしない」の項目の平均値が低く、この項目には否定的態度を示している。ただ、「一生懸命打ち込めるものがない」の項目にみられるように、目的をつかみかねているのではないだろうか。自己効力感の変数も全項目において高い値を示している。決断や依存性の変数についても同様であり、自立しえない現代の青年像が浮かび上がってくる。

この14変数のそれぞれについて、全変数取り込みによる、変数と項目の重回帰分析をおこない、偏相関と重相関係数（自由度調整済み）を求めた。結果は Table 2に示したとうりである。いずれの値も満足できるものであり、それぞれの変数における項目間の関係を確かめることができた。

ついで、14変数間の関係を検討するため、14変数間の相関を求めた（Table 3）。無責任、社会性、延期の3変数を除く11変数において8－11変数との間に有意な関係が認められた。感情の変数は、それほどたかくはないが、3つの変数を除いた変数との関係が認められ、この変数が大学生の行動の基本的な部分と関わっていると思われる。無責任のの変数も将来、社会性の2変数を除いて有意な相関が認められ、平均値はそれほど高くなかったけれども、アパシーシンドロームの主症状をなしていると思われる。特に、努力、学業、現実、決断の各変数とは高い相関を示し、責任を負いたくない傾向は怠惰やルーズさと関わる。

無感動の変数は、社会性、外罰の変数と高い相関を持ち、これら2変数は他の変数との関係の比較的低い変数であるだけに注目すべき結果となっている。このような情緒的変数

Table 2　14変数における変数と項目の偏相関と変数の自由度調整済みの重相関係数

項目 No.	偏相関	重相関	項目 No.	偏相関	重相関	項目 No.	偏相関	重相関
Ⅰ			Ⅶ			Ⅻ		
1	.829	.	31	.738	.	56	.796	.
2	.802	9	32	.664	9	58	.854	9
4	.878	8	33	.716	5	59	.900	8
5	.843	5	34	.700	2	60	.795	4
Ⅲ			Ⅷ			ⅩⅢ		
11	.740	.	37	.950	.	62	.892	.
12	.800	9	38	.945	9	63	.727	9
13	.797	7	39	.931	9	64	.914	8
15	.854	0	40	.937	3	65	.812	4
Ⅳ			Ⅸ			ⅩⅣ		
16	.679	.	41	.618	.	66	.643	.
17	.711	9	42	.637	9	67	.744	9
19	.549	2	43	.763	5	69	.665	3
20	.748	7	44	.729	2	70	.675	8
Ⅴ			Ⅹ			ⅩⅤ		
22	.824	.	46	.832	.	71	.596	.
23	.853	9	47	.849	9	72	.651	8
24	.818	7	48	.784	8	73	.646	7
25	.839	8	49	.881	3	74	.216	8
Ⅵ			Ⅺ					
26	.717	.	51	.919	.			
27	.703	9	52	.914	9			
28	.624	4	54	.887	8			
29	.630	1	55	.913	7			

Table 3　14変数間の相関係数

	Ⅰ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ	Ⅶ	Ⅷ	Ⅸ	Ⅹ	Ⅺ	Ⅻ	ⅩⅢ	ⅩⅣ	ⅩⅤ
Ⅰ	1.000													
Ⅲ	.240*	1.000												
Ⅳ	.115	.175	1.000											
Ⅴ	.099	.293*	.240*	1.000										
Ⅵ	.292*	.432*	.169	.232*	1.000									
Ⅶ	.257*	.423*	.280*	.278*	.565*	1.000								
Ⅷ	.353*	.468*	.163	.188	.479*	.350*	1.000							
Ⅸ	.233*	.197	.068	.454*	−.032	.039	.084	1.000						
Ⅹ	.253*	.550*	.294*	.553*	.187	.162	.245*	.342*	1.000					
Ⅺ	.234*	.328*	.184	.073	.269*	.197	.197	.046	.123	1.000				
Ⅻ	.319*	.311*	.197	.466*	.431*	.403*	.305*	.298*	.405*	.203	1.000			
ⅩⅢ	.312*	.287*	.171	.499*	.394*	.249*	.316*	.239*	.626*	.129	.595*	1.000		
ⅩⅣ	.241*	.518*	.230	.347*	.395*	.503*	.411*	.142	.239*	.276*	.367*	.294*	1.000	
ⅩⅤ	.235*	.358*	.190	.141	.370*	.434*	.274*	.024	.134	.373*	.303*	.131	.443*	1.000

* P<.05

は、友人関係や世の中のとらえかたと関わる変数であるのかもしれない。また、この無感動の変数は、無気力や自己効力感の変数とも高い相関を示している。努力、学業、現実の3変数は、多くの他の変数との関係が認められる。特に、努力の変数は、学業、現実の変数との間に高い相関がみられ、この3変数が互いに関連しあった因子であると思われる。さらに学業の変数は、これらの変数以外に、無気力や決断の回避の変数との高い関連が認められ、勉強の基本動機がやる気や決断力であることが確かめられた。

外罰の変数と関係が深かった変数は、無感動以外に、無気力と自己効力感の変数である。やはり、外罰傾向は自己コントロールや自信、達成感の問題であろう。無気力変数と最も高く関係する変数は、自己効力感の変数である。これは、環境への働きかけの挫折や自己の力による変革の可能性の否定が無気力につながるという、これまでのアパシー研究の結果を肯定するものである。決断や依存性の変数は、この両者の高い関係の他、すでに述べたように、アパシーシンドロームの基本構造をなすものと思われる。

なお、将来、社会性、延期は、他の変数との関わりの少なかった変数である。将来の変数は、わずかに学業と外罰の変数と低い相関がみられたのみであった。
また、さきに述べたように社会の変数は、無感動と比較的高い関係が認められており、友人関係の基本要因を示していると思われる。延期の変数は、感情、決断、依存性などの変数と関わり、モラトリアムと青年の幼児化傾向のつながりを示しているといえよう。

以上のような点について、さらに分析をすすめるため、これら14変数について主因子法による因子分析をおこなった。その結果のバリマックス回転後の因子負荷量を示したのがTable 4である。第1因子には、無責任、、努力、学業、現実、決断の5変数がまとめられ、第2因子には、感情、外罰、無気力、自己効力感の4変数がまとめられた。さらに、第3因子には、無感動、社会性の3変数がまとめられ、第4因子には、将来、延期、依存性の3変数がまとめられた。第1因子は、「努力しないで、なんとなく生きていく」因子としてまとめることのできる、計画や努力することを嫌い、結果だけを追い求める怠惰の因子である。ここには、豊かな時代に育った現代の青年の人生観の一端が表れているといえないか。第2因子は、「自信がなく、不満を秘めたやる気のなさ」の因子である。この因子にあらわされているものは、簡単にあきらめてしまう、また、その原因を自己の外に帰属させることによって要求不満を解消使用とする青年像である。

第3因子は、「シラけた、ひとり志向」因子である。それほど高い値を示さなかったとはいえ、友人との交流に負担を感じる青年の存在は、従来考察されてきた青年期の交友関係の記述を書き換えるものかもしれない。第4因子は、「大人になりたくない」因子である。青年は大学生活が世の中の現実からかけ離れた世界であることを認識している。それだけに、「いま」の生活が続くことを願っている。しかし、だからといって充実した生活を送っているわけではない。

Table 4　アパシー下位変数のバリマックス回転後の因子負荷量

変数	第1次元		第2次元		第3次元		第4次元
I	.118	I	.378*	I	−.119	I	−.173
III	.560*	III	−.009	III	.083	III	−.094
IV	−.049	IV	−.035	IV	.202	IV	.456*
V	.079	V	.067	V	.560*	V	.086
VI	.373*	VI	.204	VI	−.318	VI	.076
VII	.336*	VII	.054	VII	−.039	VII	.253
VIII	.334*	VIII	.298	VIII	−.191	VIII	−.172
IX	.227	IX	−.015	IX	.551*	IX	−.332
X	−.227	X	.366*	X	.349	X	.194
XI	.021	XI	.040	XI	−.099	XI	.499*
XII	.020	XII	.381*	XII	.108	XII	.070
XIII	−.186	XIII	.578*	XIII	.077	XIII	−.017
XIV	.434*	XIV	−.061	XIV	.156	XIV	.196
XV	.212	XV	−.039	XV	−.053	XV	.453*

因子分析の結果は、14変数間の相関係数の分析の結果を追認するものであった。アパシー・シンドロームには多くの症状が含まれている。この14の下位尺度は、もちろん、それらを網羅したものではないが、それらの一端と関連を明らかにするものである。

4　要　約

女子大学生を被検者にして、ステューデント・アパシーの下位尺度の検討を試みたものである。15の下位変数のなかから選択した14の変数を用いて、内部の整合性と関連の分析を試みた。重回帰分析と因子分析の結果、いくつかの点が明らかになった。

平均値からみるとアパシー下位変数は、10〜11点代の下位得点群（無責任、将来、無感動、社会性、外罰、無気力の6変数）と、13〜14点代の上位得点群（感情、努力、学業、現実、延期、自己効力感、決断、依存性の8変数）とに分けることができた。

これらの14変数は、因子分析の結果、第1因子「努力しないで、なんとなく生きていく」、第2因子は、「自信がなく、不満を秘めたやる気のなさ」、第3因子は、「シラけた、ひとり志向」、第4因子は、「大人になりたくない」因子と名づけた。これらは今の大学生の現状をあらわしているといえよう。

さきに述べた分析は、今後検証すべき仮説を多く含むものである。しかし、少なくとも、これらの分析から、ステューデント・アパシーが、青年の未分化な発達、幼児性の問題であることは明らかである。

文献

安藤延男　ステューデント・アパシー　大学生のメンタルヘルス　現代のエスプリ266　至文堂　1989　47-56

土居健郎　甘えの構造　弘文堂　1971　173-178

深谷昌志　無気力化する子どもたち　日本放送出版協会　1990

Geer, J. H., & Maisel, E. Ealuating the effects of the prediction – controle confound. *J. of personality and social psychology*, 4, 1972, 314-319

波多野余夫　稲垣佳世子　無気力の心理学　中央公論社　1981

堀淑昭　「しらけ」の人間学　現代のエスプリ168　ステューデントアパシー　至文堂　1981　201-209

石井完一郎　大学大衆化におけるステューデント・アパシーについて　「キャンパス特有の無気力を展望して」　現代のエスプリ168　至文堂　1981　5-23

岩田紀　都会人の心理　ナカニシヤ出版　1987　15-21　1980

久世敏雄　青年期の社会的態度　福村出版　1989　7-9

宮田加久子　無気力のメカニズム　その予防と克服のために　誠信書房　1991

水口禮治　無気力からの脱出　福村出版　1985　134-140

西平重喜　世論調査による同時代史　ブレーン出版　1987　13-39

小批木啓吾　モラトリアム時代の人間　中央公論　1977.10（モラトリアム時代の人間　中央公論社　1978）

下山晴彦　大学生のモラトリアムの下位分類の研究－アイデンティティの発達との関連で－　教育心理学研究40-2　1992　121-129

反田健　現代青年の幸福感　現代青年の生きがい　現代青年心理学講座7　金子書房　1972　107-155

土川隆史　ステューデントアパシーの輪郭　ステューデント・アパシー　土川隆史編　同胞舎　1990　2-65

Walters, P. A., STUDENT APATHY. Blaine, G. B. Jr. & McArthur C. C. (Eds.) *Emotional problems of the student*. New York, APPleton-Century Crofts.（石井完一郎他監訳　学生の情緒問題　文光堂　1975）